

# 子供たちが健康な心をもって成長できる社会

水島 広子

衆議院議員

## 1 精神科医としての経験から

日本がいま抱えている問題の多くの原因は、突き詰めていくと、「多様な価値観が認められない」「コミュニケーション不全」、この二つに集約されると思います。私はこれまで精神科医として、主に思春期前後の子供たちの心の病を、対人関係に焦点を当てた治療法で治してきました。精神科を受診される患者さんの多くは、社会によって心を病んでしまうことが多いものです。特に、思春期前後の多感な年頃では、身近な社会である家族や学校という環境から受ける影響は非常に大きなものがあります。入院してせっかく治っても、元の環境に戻すと、また発病して病院に舞い戻ってきてしまう、ということの繰り返しです。これは、子供に限らず大人の患者さんでも同じことです。

「子供たちが健康な心をもって成長できる社会」の実現のために、政治家として出来る役割を考えてみたいと思います。

## 2 大人たちのモラルの低下

相次ぐ少年犯罪やいじめなどの問題を見て、なぜ、日本の子どもたちは、こんなふうになってしまったのか？との疑問を持っている方も多いと思います。いま親たちは、自分の子どもが少年犯罪の被害者となる危険に怯え、同時に、加害者となる心配もあることでしょう。私たちは、子どもたちの心が急速に病んでいる時代に生きていけると言えます。

子供の事件が報道されると、「今の子供は物が豊か

になったから、我慢を知らない」「甘やかすからわがまになった」などという意見が登場します。その根拠となるのが、「昔は何でも我慢するのが当たり前だった」などという自らの経験論です。でも、経済的に豊かであつてもきちんとしたしつけによって「我慢強い」子を育てている家庭も存在します。

時代の中で変化した最大の因子の一つは、子どもの数だと思います。最近になって少子化が社会問題となりましたが、今の子ども親たちも、一人っ子・二人っ子世代です。つまり、子供から見ると、身の回りに子供が少ないことも問題ですが、もっと重要なのは、身近に大人の数が少ないことだと思います。昔は身の回りに近所のおばさんや親戚のおじさんなど大人たちがたくさんいて、自分の親に多少問題があつても、別の大人が代わりに支えてくれました。今は、子どもにとっての身近な大人が親だけというようなケースも少なくありません。そんな中では親が子どもに与える影響は非常に大きなものになってしまいます。親子関係が今ほど緊張しやすい時代はかつてなかったのではないのでしょうか。

「体罰をしなくなったから痛みが分からなくなった」などという意見がありますが、痛みというのは体罰で覚えるものではありません。もっと問題なのは、暴力的な表現が氾濫している子供向けメディアや、見本を示すべき大人自身のモラルの低下ではないでしょうか。親や教師をも含めて、子どもの周囲に、尊敬に値する大人が一人もいないというケースが増えています。尊敬できない教師に殴られた子供が、一時的には言うことを聞いても、それは、ただ不本意に黙らせられただけであり、より大きな「爆発」のエネルギーをため込んだと考えるべきでしょう。こうして、「飽和状態」になったとこ

ろを、ほんの少しのきっかけでキレてしまうのです。

子供同士の喧嘩には、適度な力加減、相手との交渉など、教育的な意味がありますが、上から一方的な暴力を受けるだけの「体罰」は、子供たちに恐怖感を与え、不満を内包させ、暴力を正当化する卑しい大人の姿を目の当たりにするだけです。子供たちのモラルをさらに低下させる効果しかありません。

### 3 コミュニケーション不全の時代——

心の病にかかったり、問題行動を起こす子供の多くに共通するのは、自分の気持ちを言葉で表現する能力の低さ、つまりコミュニケーション能力の不足です。本来なら他者とのコミュニケーションを通して解決されるはずの感情が、解決されされずに蓄積され、病気や問題行動といった不自然な形で爆発してしまうのです。自分のストレスを言葉ではなく病気や問題行動によってしか表現できないという、一種の歪んだコミュニケーションの形であると言えます。

昔は子供や大人が入り交じる地域社会で無意識のうちに育てられたコミュニケーション能力が、少子化に伴ってそういう場がなくなったことは前にも述べましたが、さらに偏差値教育や経済至上主義がそれに拍車をかけてきたのだと思います。

そもそも、これだけ価値観が多様化し、社会が国際化した今の時代は、昔よりもずっと高いコミュニケーション能力が要求されるはずで、今の子どもたちへの処方箋は、言葉によるコミュニケーションの能力を育てることです。コミュニケーションの基本は、自分の考えや気持ちをきちんと表現し、相手の考えや気持ちをしっかりと受け止め、その一致点や相違点を考えていくというものです。自分の考えや気持ちをためこむことなく相手に伝え、必要なときには他人の力を借りて道を切り開いていける、そして最終的な妥協や解決に至ることができる、そのためのコミュニケーション能力こそが、学歴や知識などよりもはるかに重要なその人の人生の質を決める一番の財産であると言っても過言ではありません。このような重要な能力を育てる

環境こそ、教育現場でも最も優先されなければならないのではないのでしょうか。

### 4 まず大人たちがコミュニケーションの見本を——

コミュニケーションの基本を身につけ、ストレスに強い子供に育てていくためには、まずは親を始めとする大人たちが、自らのコミュニケーションを振り返り、良い手本となるのが大切です。外国の子供たちは、日本の子供たちよりも、友人の親とも対等に話が出来たり、道で出会った他人に挨拶したり、困っている人に手を貸したり、道を譲られたら笑顔で礼をするという習慣が身に付いているように思えます。それは、親たちが、コミュニケーションを駆使することこそが、自分を守る最大の「武器」であることを良く知っていて、自らそれを実践しているために、子供たちも小さいときから自然と身に付いているからなのでしょう。

「子育てはおまえに任せたはずだ」などと言って、夫婦の話し合いを打ち切っている多くの日本の親の姿は、子どもにとって悪いコミュニケーションの見本になるだけです。ましてや、国会議員がヤジにキレて、水をかけるなど言語道断です。少子化の今、大人たち自身が子供の見本となるように、いかにコミュニケーション能力を高めていけるかに、子どもたちの今後がかかっていると思います。

### 5 単一価値観の押しつけ——

今の子供たちの環境を象徴する現象に「いじめ」があります。いじめというのは、自分と違う他人の存在を受け入れることができない結果起こるものと言えます。人間の多様性を認められない排他的な行動とも言えます。いじめの問題を根本的に解決するには、「人はみな違う」という当たり前のことを認識して、自分も他人も大切に出来る子供を育てることが大切です。そのためにも、まずは大人社会を、いろいろな生き方が可能な多様性が認められる社会にしていかなければ

ればならないと思います。

今の大人社会は、「単一の価値観」の押しつけに満ちあふれています。その代表的な例が、夫婦は同じ姓を名乗らなければならないとする今の民法ではないでしょうか。ここには、「夫婦は同じ姓を名乗った方が(あなたの)家族は幸せなのだ」「夫婦が別の姓だと(あなたの)子供がかわいそう」とする、ある種傲慢な押しつけが見えます。

各家庭にはそれぞれの事情があるわけですから、自分たち夫婦にとって一番良い方法が、必ずしも別の夫婦にとっても一番良い方法だとは限りません。同じ姓を名乗ることによって円満が保たれる家庭もあれば、別姓にする事によって、一人一人が生き生きと暮らせる家庭もあるのです。こうした家族の多様なあり方を否定し、各家庭の実状も考えずに家族のあり方を一つの枠にはめ込もうとする現在の民法は、今の社会の悪癖を象徴するものです。

## 6 多様な価値観の認められる社会

私は、民法の改正に対する論議を見ていると、いじめを始めとする今の子供の置かれている環境を見るような気がしてなりません。民法改正賛成派と反対派の論議は、簡単に分けると次のような構図になっているからです。

賛成派＝自分と他人との違いを認め、お互いを尊重して生きていこう。

反対派＝みんな同じじゃなきゃイヤだ。みんなと違う人は排除しよう。

民法の改正は、別姓夫婦の利益のためだけではなく、あらゆる人々が他人の価値観を尊重しながら生きていくという、人間としての基本的な考え方の確立につながるのだと信じます。多様な価値観を尊重できる社会づくりのために、まずは率先して法改正をすることこそが、国民のための政治の第一歩ではないかと思うのです。

ところで今の民法には、もう一つ重大な欠陥があります。それは、非嫡出子、つまり法律上結婚していな

い母親から生まれた子供に対する差別を明文化したものだということです。非嫡出子は、法律上、相続の時に差別を受けるだけでなく、普通に社会生活を送る上でも、就職や結婚の際に差別を受けています。先日、衆議院の予算委員会で、自らが首相になった経緯を「密室的」と批判された森首相は、「私が密室で私生児のように生まれたと言われるのは不愉快」と答弁しました。一国の首相がこのような差別的発言をすることに代表されるように、子供に対する生まれながらの差別を正当化するような大人社会のあり方も、いじめを許す大きな原因になっているのではないのでしょうか？ 日本のあらゆる「悪」の根元となっているのが今の民法と言っても過言ではありません。

「自分と他人との違いを認め、お互いを尊重して生きていこう」

「みんな同じじゃなきゃイヤだ。みんなと違う人は排除しよう」

どちらの社会が、子供たちの環境にとって良いのかは、一目瞭然です。

## 7 心の健康度の高い社会を目指して

子供たちが健康な心をもって成長できる社会の実現のためには、子供たちだけではなく、周囲の大人の環境を変えていくことが大切だと述べてまいりました。大人の心を健康にするためには、コミュニケーション能力を高めて、多様な価値観を認めることで、自分も他人も大切にできる社会を実現すると共に、年金や公的介護などの保障をしっかりとすることで、老後の不安を取り除き、だれもが安心して歳を取れる社会にすることが不可欠だと思います。

心の健康度の低い社会は、心を病んだり、本来の才能を十分に発揮できない人たち本人にとって不幸であるばかりではなく、日本経済全体にとっても多大な損失と言わざるを得ません。こうした単一価値観に支配された現状を改善していかなければ、現在日本を取り巻く閉塞的状况からも、なかなか脱出できないのではないのでしょうか。